

# 人生地理学と私

安田喜憲

## 『人生地理学』が評価された1971年

私は、大学で地理学を専攻しました。これが本日の講演の内容と深い関係があります。なぜなら、創価学会の創立者である初代会長の牧口先生は地理学者であるからです。私が大学院に入って地理学を本格的に専攻し、地理学者として生きようという決意をした1971年に、牧口先生の『人生地理学』<sup>1)</sup>が日本の地理学会で初めて評価されました。

『人生地理学』は、牧口先生が1903年（明治36年）

に発表された膨大なものです。牧口先生は小学校の先生として貧しい子どもを助けながら、何年もかけて『人生地理学』をお書きになった。当時、日本は巨大な西洋文明の荒波に翻弄され、伝統的な日本の世界観を否定し、猫も杓子も西洋の学問や技術を神様のように崇拜していた時代です。その時代に牧口先生は『人生地理学』をお書きになったのです。

しかしあまりに膨大な量であったために、出版してくれるところはどこもない。それで先生は困られて、当時『日本風景論』<sup>2)</sup>を書いて有名だった志賀重昂先生

に頼まれた。志賀先生はそれを見られて、手を入れ、1903年にやっと刊行することができたのです。

そして『人生地理学』は最近では第三文明社から1983年と1996年の2回にわたって斎藤正二氏の膨大な注がつけられて刊行されました。<sup>(3)</sup>

1903年に刊行された『人生地理学』はしかしながら日本の地理学会で全く評価されなかった。その『人生地理学』が日本の地理学会で初めて評価されたのが1971年なのです。まさに私が地理学者になろうと決意したときです。私は、その『人生地理学』という言葉を日本地理学会で初めて聞きました。日本地理学会の石田龍次郎先生が「明治・大正期の日本の地理学界の思想的動向」という会長講演<sup>(4)</sup>のなかで、牧口先生の『人生地理学』について言及されたのです。1903年に『人生地理学』が刊行されてから実に70年近い年月が経っていました。

### 地人相関論こそが地理学の王道

牧口先生がもつとも大事にされた地理学の理論は

「地人相関論」でした。大地と人間の関係、自然と人間の関係が地理学の根本を形成する。これこそが、百年後にも生き続ける理論であると書いておられます。

私は、この『人生地理学』を見て、これこそが地理学の王道である。自然と人間の関係を研究する、大地と人間の関係を研究することが地理学の王道であると確信しました。

しかし1970年代の日本は高度経済成長期の真ただ中です。就職はたくさんありました。日本経済がどんどん発展し、経済は無限の資源を前提にしてどこまでも発展するかのような錯覚を皆が覚えていた時代です。そういう時代に流行っていた地理学は、どこに工場を建てたらいいか、マーケットやお店の立地はどういうふうにするか、儲かるか、そういう話が主流でした。

その時代に、地球の資源には限界がある、人間の発展には限界がある、いくら人間が頑張っても、この地球という小さな資源の中で生きなければならぬ、人間は自然との関係を無視しては生きられないというよ

うな話をする、そんな古臭い話は「環境決定論」だと言つて批判されました。

当時の地理学の風潮をよく反映しているものとして、1978年に専修大学の教授だった国松久弥先生が書かれた『「人生地理学」概論<sup>5)</sup>』があります。国松先生は牧口先生の『人生地理学』に対してよい理解を示された先生です。しかし、今から見るとその国松先生においてさえ、当時の地理学界の風潮から自由でなかったことがわかります。「牧口先生は、地人相関論こそが地理学の王道である、それだけが地理学だ、自然と人間の関係の研究が地理学の王道だと言つておられるけれども、それだけではない。地理学の王道はもっと別にありますよ。どこに工場を建てたらいいか、どこにマーカーの中心を置いたらいいか、それが地理学の王道であつて、残念ながら牧口先生が言つておられるような地理学は地理学の王道ではない」という意味のことを国松先生は書いておられるのです。

しかし私は自分の地理学を、「自然と人間の関係の地理学、これこそが地理学の王道である」というふうに

決めました。

### 命運が尽きたと思つた時

その後、私は広島大学の助手になりました。そのころには自然と人間の関係、「地人相関論」はますます古臭い学問だというふうになつて、私は広島大学総合科学部の地理学教室で15年近くも助手生活を余儀なくされました。15年近くも助手をしていると、皆がかわいそうだと思つてくださる。40歳を過ぎてまだまだ助手をしているわけですから。見るに見かねた先生が、「安田君、そんな古臭い地人相関論、自然と人間の関係の学問をやっていたら、いつまでたつても助教授にはなれないよ。もう少しどこに工場を建てるとか、どこにマーカーの中心地があつて、そこを中心にして商業ゾーンをどう作るとか、そういう研究をなさい。地人相関論をやつていても、いつまでたつてもうだつが上まらないよ」と言つてくれました。

そのお言葉のように、私は地理学の研究者としても、まったくうだつが上がりませんでした。万年助手を覚

悟していました。そこで、地理学では飯は食っていけないなあと思いい「環境考古学」という分野を自分で作りました。

1987年に「環境論の新たな地平<sup>6</sup>」という論文を雑誌「地理」に書きました。そして、東京都立大学（現在の首都大学東京）のある教授が、私の論文を教室に持って来て「こんなものを読むな！」と学生に言われたそうです。それを聞いて、私は反面嬉しかったですけれども。それぐらい自然と人間の関係を研究する「地人相関論」は地理学にとっては危ないものと、そのころ考えられていたのです。

さらに助手最後の年には殺人事件が起きました。学部長殺人事件です。私は容疑者ABCのCに挙がりました（笑）。私はこれで自分の人生はもう終わりかもしれないと思いました。皆が、私を犯人だと思っていたと思います。学部長が突然殺された。その遺体に砂がまいてあったのです。

私は、土の中に残っている花粉の化石を使って、自然と人間の関係を研究していました。花粉症になるあ

の憎き花粉ですが、化学的に非常に強い膜をもっている土の中で何万年でも腐らないのです。しかも花粉の形や大きさは植物の種類によって異なります。そこで花粉の化石を土の中からとり出して、顕微鏡で観察し、どんな種類の花粉がどれぐらいあるかということを決定的ことによって、過去の森の状態、あるいは気候の変動を復元することができます。人間がいつごろ農耕を開始したとか、どのように森林を破壊したかなども明らかにできます。私は花粉の化石を使って環境を復元し、それが人間の歴史とどう関係していたかをずっと研究してきました。ですから、世界中の砂や土を私は集めていたわけです。広島大学で研究のために砂をもっているのは私しかいなかった（笑）。

それで刑事さんが毎朝10時になると必ず研究室にやって来ます。「ああ、安田さん、また今日も勉強をしていますねえ。いやあ、きょうは何をやっているんですか」と来るんです。ところが、毎日来られて刑事さんと話していると、ひよっとすると私が殺したんじゃないかと思うようになるんです。誘導尋問というのは恐

ろしいですよ。気の弱い人なら、警察の取調べ室に連れて行かれて、ガートやられたら「やりました」と言ってしまう人がきつと思いました。私は警察に連れて行かれることはなかったけど、刑事が疑っていることがわかりましたから、どこにも出張しないで研究室にいました。

それから約40日目に犯人が捕らえられたのですが、犯人は同僚の物理学の助手の先生でした。学部長も物理学の先生、殺したのは同僚の助手の先生で、私もよく知っている人でした。不思議でしたね。これも、運命の出会いでした。学部長が殺されたというので、私は大学に飛んで行ったら、偶然同じエレベーターで彼と乗りあわせました。彼は3階、私は5階に研究室がありました。私は「おはよう」と言ったんですが、彼は何も言わないで3階で降りて行つた。それが、彼を見た最後でした。前夜、学部長を殺して、その後どこかで野宿でもしていたんですかね。

彼は実に優しい穏やかな人だった。誰も、彼がやったと夢にも思わなかった。犯人がわかったときは、

女性の職員が、かわいそうだと泣いていました。私も42歳まで助手でいましたから、長いこと助手をしていると、時には頭にくるわけです。教授のほっぺを一発ぐらいぶん殴つてやろうかと思つたこともありました。彼は理論物理学の専攻で、理論物理学の教授がお2人、定年で辞められた。当然、助手だから、ひとつぐらい自分が上されるポストがあるかと思つていた。ところが、学部長が実験物理学のご専門で、理論物理学はもう時代遅れだと言つて、実験物理学の教授をポンと2人もつてこられた。

理学部にいると、一番頭のいい人が物理学、次が数学、化学に行つて、生物学に行つて、最後にアホなやつが地理学に行くんです(笑)。物理に行くのは頭がいい人です。そういう人が、長い間の助手の苦勞を思いやることなく、業績だけで年老いた助手を昇進させなかつたり、助手は助手で思うようにならないと人を殺す。そこに、物理学という学問の限界を感じました。

そのときに本日のタイトル、命の重要性に気づいたのです(講演タイトルは「命の水の文明史」)。「物理学なん

かたいしたことないな。頭がいいといつて、われわれにはわけのわからんことをやっているけれども、命という概念をもちだすと意外にだめなんじゃないか」と、そのときフツとそう思いました。

### 地獄で聞いた仏の声

40日間、犯人が見つかるまで、私はどこにも行けない。しかたがないから本を書いたんです。『世界史のなかの縄文文化』<sup>(7)</sup>がそれです。その本が私の人生を決めたと思いますが、その原稿を雄山閣という出版社にもつていったら、「あなたが本を書いても売れないから、まあ印税分だけ、本で引き取ってください」と言われた。「印税分を本であげますから、それで勘弁してくださいよ」ということで、私は本をもらった。ところが、私の部屋は小さくて、本を置いておく場所がないわけです。それで、片端から配った。早く本がなくなればいいと配った。片端から配った人の中に梅原猛先生がいらっしゃったのです。そして梅原先生が、その本を読んでくださった。「これは面白いことをやっているや

つがいる」

1987年12月のことでした。京都の国際日本文化研究センターの梅原先生から電話がかかってきました。ちようど国際日本文化研究センターができたばかりで、私も行きたいなと思っていたところでした。電話口で、「君をうちの助教授に取りたいと思うけど、どうかね」とおっしゃった。それは地獄で聞いた仏の声でした。私は電話口で、「はい、すぐ行きます」と言いました(笑)。梅原先生は今でも、「人事をやるときには、すぐに行きたいと思っても、一晩考えますと言え。それが常道である。すぐ行きますと言ったのはおまえだけだ」と言われます。それほどに私は切羽詰まっていました。

### 地球環境問題が開いてくれた私の人生

やっこの思いで1988年4月、42歳のとき、京都に来ました。私の人生が開いたんです。その1980年代の後半には、南極でオゾンホールが発見された。そして、地球環境問題が注目されるようになりました。今までは、高度経済成長で、どこに工場を造成したら

いいかだけを考え、地球の資源は無限にあると思っていた人たちが、熱帯雨林が急速になくなっていく、地球温暖化が進んでくる、海洋資源もなくなってくる現実に直面し始めた。

そのころになってやっと、牧口先生が最初におっしゃった「地人相関論」に、人々が注目し始めたのです。人間の活動には限界がある、人間は自然の子であって、この地球の資源の限界を突破して生きることができないのだ、自然との深い関係の中でしか人間は生きられないのだということにやっと気がつき始めた。

私の人生は地球環境問題が開いてくれたようなものです。それまで、いくら「気候が変わったら文明は崩壊する」「森林がなくなったら文明は滅亡する」という話をして、「そんなことはない。人間には叡智がある。技術力がある」といつて相手にされませんでした。そういう人々がショックを受けたのは、1994年の東北地方の冷害でした。皆、毎日まずい外米を食べざるを得なかったのです。これだけ高度技術で武装しているながら、ちょっと気温が下がっただけで、われわれの

生活が危機に直面するという現実を、人々は実感したのです。そして、いまや地球温暖化に直面して、2050年から2070年に現代文明そのものの存続が危ぶまれる危機に、われわれは直面し始めているわけです。<sup>(8)</sup>地球環境問題が注目されると私の学問も注目されるようになりました。不思議ですね。

### 牢獄と教祖

国際日本文化研究センターに着任して、梅原先生と中国の「長江文明の探求」のプロジェクトをやりました。私は、湖南省の張家界という美しい桃源郷のようなどころに行った。そこで白い髭を生やしたおじいさんが「手相を見てやる」と言うわけです。「日本人だから、金を持っているからゆするのかな、まあいいや」と思って見てもらった。そしたら、「あなたの人生は42歳までは、悪い人に出会ったり、むちゃくちゃ苦勞する。しかし、42歳のときに偉い人に助けられる。それ以降は、あなたの人生は何でも思うようになります」と言った(笑)。42歳というのが私が京都に来た歳で



す。

「42歳になって助けられた偉い人ってどんな人ですか」と聞いた。もちろん私は梅原先生が助けてくださったと思っていました。そして、易者は「それはわかりません」と言った。「でも、偉い人ですよ」と、それだけしか言わなかった。私は日本に帰って来て、その話を梅原先生にしたわけです。「梅原先生、こういうふうに言われました。その偉い人は千年に一人出るかどうかの人だと言いました」と（実際、私は梅原先生は千年に一人出るか出ないかの人だと思っている）。そんなことを易者は言っていないんですけどね（笑）。「その偉い人は先生のことですよ」と申し上げたのです。

そして、梅原先生は、「中国の易者の言うことは当たる。すぐに会いに行く」と言われた（笑）。それで、張家界まで易者に会いに行った。私は易者が「この人は十年に一人です」なんて言ったらどうしようかと思つて、ものすごく心配でした。ところが幸いなことに、その日は易者がいなかったのです（笑）。

このように私の人生は、梅原猛先生という千年に一

人出るかどうかの偉い先生に助けられて救われました。そのとき思つたのは、広島で15年間何をやってもうまくいかなかった。どうしてこれほど自分の人生は苦勞しなければいけないか。何をやっても裏目、裏目に出る。そして、周りにも悪い人が多かった。アメリカからやって来た教授とも衝突した。今思うと、私は、15年間は牢獄に入っていた。広島大学時代は自分の人生の中で牢獄の時代だったと思います。

そのときに、牧口先生のことを思つたら救われました。牧口先生が創価学会の教祖になれたのはなぜか。牢獄に入られたからだと思えます（笑）。戸田城聖先生がなぜ教祖になられたのか。牢獄に入られたからではないのか。牢獄に入らないと、人間はやつぱりリーダーにはなれないんです（笑）。私は15年間牢獄に入つてよかつたなあ（笑）。

### 生命の法の地理学

牧口先生はなぜ法華経の「生命の法」の重要性に着眼されたのか。この生命の法こそが人類を救う哲学で



あるということに、どうしてたどり着かれたのか。

私は牧口先生が自然と人間の関係を研究されていたからこそ、命の大切さ、生命の法の大切さに気づかれたと思うのです。自然と人間の関係、大地と人間の関係、その研究をしていったら、命というものを無視できない。われわれは命あるものと関係しています。自然と関係しているというのは、どういうことか。それは、命あるものに取り囲まれ、命の交流をしているということか。人間が生きているということは、どういうことか。それは命と命が交流する、命と命が融合することにはほかならないのです。

命が生まれるのも、お父さんの命とお母さんの命が結合し融合して子どもが生まれるわけです。人間が生きたるためには、命ある食べ物をいただかなければいけない。人間が暮らす家、これも命あるもので作ったものです。人間が暮らす大地。大地には無数のバクテリアが生息しています。このバクテリアの世界はまだ人類には未解明の世界ですが、膨大な命あるものが大地に埋まっている。その命にわれわれは支えられて暮ら

しているのです。

何よりも「関係性」というものを考えたときには、命のやり取りこそが関係性の原点なのです。私がここで話をしている。これは皆さんと命の会話をしているのです。誰もいらつしやらない会場で、私一人がしゃべっていたら、おかしいですよ。私がしゃべれば、皆さんも笑って納得してください。そして笑ってください。私はまた得意になって話し続ける。これが命と命の交流です。大地と人間の関係、自然と人間の関係、社会と人間の関係、人間と人間の関係というもの、命の関係性にほかならないのです。関係性とは命の輪、命の連鎖なのです。

### 山・里・海の連関の重要性

最近ようやく「魚付き林」が注目され始めました。魚がたくさんいるところは森の多いところであることを、漁師さんは体験的に知っていました。宮城県気仙沼の漁師、畠山重篤先生は木を植えて「牡蠣かきの森」を作って、その森の中の栄養分が海に流れてきて牡蠣を

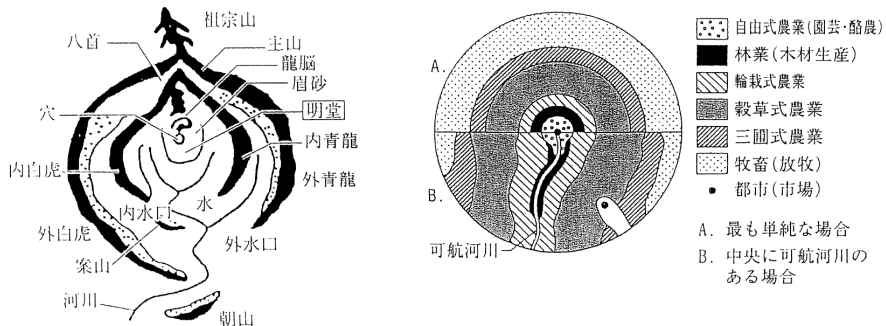
育てることを実証されたお一人です。(9) そういう森・里・海の関係性・循環が重要であることに、ようやく最近多くの人々が気づき始めました。

ところが『人生地理学』には、その森・里・海の関係性の重要性が、ちゃんと指摘されています。牧口先生は「森林が茂っている海岸には魚が多く集まり、禿げ山近くの海岸には魚がいない。海岸や湖沼の周辺にある豊かな森は、『魚付き林』と呼ばれる(『魚寄せ林』『網代山』とも)。森の栄養が魚を育むのである」ということを指摘されているのです。

今、環境問題が起こってきて、森林資源が消失すると海の資源がなくなっていくことにも、やっとわれわれは気づいたのですが。牧口先生は「森・里・海の循環」の重要性に、すでに百年前に気づいておられたのです。

### 西洋と東洋の空間認知の相違

日本の地理学の「中心地論」に対して、百年前の牧口先生も真っ向から反対しています。こんな理論は日



東洋の空間認知【左】と西洋の空間認知【右】  
 (安田喜憲『文明の環境史観』中公叢書より)

本には合わないということを述べられています。

図の右側はヨーロッパのチューネンという人が考えた中心地論モデルです。中心的な都市の周りで園芸、酪農をやり、その周りに穀物農業地帯が広がり、さらにその外側に粗放な農業をやる地帯があり、一番外側に牧畜をやる牧草地が広がるのが、ヨーロッパの空間利用です。人間の活動は町や都市を中心として、同心円的に配列されるというのが、ヨーロッパの空間認識です。その後、クリスタラーという人が、この理論をさらに発展させました。

日本の地理学者は皆、この中心地論のとりこになっただけです。「畑作牧畜民」のヨーロッパ人が考え出したこの空間認識こそが普遍的に正しい人間の空間認識のあり方であると、日本の地理学者は信じて疑わなかった。そこで、この同心円モデルを日本に当てはめ、たとえば大阪の中心地はどこかとかいうような論文をいっぱい書いたのです。

フランスやドイツの農村を飛行機から見ると、町があつて、農耕地があつて、牧草地がある。たしかに同

心円的に分布しています。ヨーロッパは氷河時代に厚い氷に覆われていたため、山が削られ平らな台地があつています。どこまでも平らな台地です。そこに町を作り、その周辺に園芸家や酪農家が暮らして都市に野菜や牛乳を提供し、次に麦を栽培する農耕地ができ、一番外側に家畜を放牧する牧草地ができる。これは当たり前のことです。だから同心円的に分布するのはです。

ところが、われわれは違います。われわれはお米を作っている。お米は水がないと作れません。ですから、暮らしの中心は「水」が鍵になるのです。ヨーロッパの土地利用は天水農業ですから、雨は天から降ってきます。ですから川の流れに大きく左右されることはありません。しかし、日本の稲作漁撈社会では、川の流域が暮らしの基本になります。「稲作漁撈民」の世界では、川の流域が空間認識の重要な単位となるのです。

図の左が、稲作漁撈民の理想的な生活空間を描いた風水図です。北と東と西は山で囲まれて、豊かな盆地を守っている。盆地の北側の真ん中にある明堂という

穴からコンコンと水が溢れてくる。その水は盆地の水田を潤し、南へと流れていく。こういうところが、稲作にはもつとも適したところなのです。

それは京都盆地を見ていただいたらわかります。東山、北山、西山に囲まれて真ん中の神泉苑から水がコンコンと溢れている。そして賀茂川から淀川となつて南の大阪のほうに流れていく。こういうところが、稲作漁撈民がもつとも安寧に暮らせるところなのです。

どこまでも牧草地や畑の広がる台地で町や都市を中心として同心円的に配列するヨーロッパの畑作牧畜民の空間利用とは、根本的に相違するのです。くりかえします。前者のヨーロッパの土地利用においては水はそれほど重要ではない。ところが日本の土地利用の鍵は水にあるのです。

米を作る社会の空間認識を、ヨーロッパのモデルを取り入れていくら研究しても、何もわかるはずがないのです。百年も前に牧口先生は、「このモデルを日本に適用するのはおかしい」と指摘されている。これはすごいことです。その時代、横文字で書いたものを翻訳

して紹介するのが、権威ある東京大学の先生方がすることだった。自分のアイデアではないのです。ヨーロッパ人の学問をただ単に丸写ししているのが学問だと思われていた時代に、牧口先生は「それはおかしい。日本人には、日本人独自の空間認識、歴史認識がある。これを研究するのが地理学である」と指摘されているのです。それは本当にすごいことです。

#### ローカルがグローバルに直結する

そして、もうひとつ先生が注目されたのは郷土です。「郷土がわかれば、世界がわかる」。大阪がわかったら、世界がわかるということを指摘されているのです。これは、すさまじい先見性のある哲学です。

グローバル化こそが人類を幸せにできると信じている人々が今でも多いのですが、ようやく21世紀になって、ローカル、郷土の重要性に人々が注目を始めた。「シンク・グローバルリー、アクト・ローカリー（グローバルな思考の下で、ローカルを大切にして行動せよ）」とか、グローバルとローカルを合わせた「グローバル」とい

うような言葉まで出始めていますが、百年前に「郷土がわかれば、世界がわかる」と牧口先生は指摘されているのです。それもまた、すさまじい卓見です。

日本をグローバルなアメリカの市場原理主義に合わせる改革が進行するなかで、地方が疲弊した。いま、地方をどう再生すればいいかということが日本のきわめて重要な政治課題となっています。その、日本人が生き残りをかけた政治課題である「地域をどう再生させるか」に直面したときに、「郷土がわかれば、世界がわかる」という牧口先生の言葉の意味は大きなものがあります。公明党はこの牧口先生の考えをマニフェストにしたらどうでしょうか。太田昭宏代表は私の本を読んでくださって、ご自分のホームページで「この本はいい」と宣伝してくださいました。とてもありがたいと思います。太田代表には必ず私の考えがわかっているだけだと思います。牧口先生の『人生地理学』、これを21世紀の公明党のマニフェストにしたらいいいのではないのでしょうか。牧口先生は、本当に素晴らしい先生です。

## 世界文明研究所の創設

そしてもうひとつ、牧口先生は「地理学の究極は文明論だ」と言われているのです。百年前に、よくぞ言われたものだと思います。今日では、たとえば「文明の衝突」とか、いろいろなことで文明という言葉がよく使われるようになりました。トインビー博士と会話され世界の文明論の展開と発展に大きく寄与されている池田大作名誉会長の思想の根幹も文明論にあると思います。池田名誉会長が「文明」というものになぜ注目されたのか。それは、トインビー博士にお会いになっただけではなく、牧口先生の『人生地理学』の本に書いてあるからではないでしょうか。戸田城聖先生の「生命の法」、池田大作先生の「文明論」も、牧口先生の『人生地理学』の中にすでにその端緒が見られるのです。

この間、北海道の講演に招待されました。戸田先生の立派な記念館を案内していただきました。桜の咲く美しい季節でした。「ここで生命の法を説かれたのか」

そう思うにふさわしい場所でした。「生命の法」を重視された戸田城聖先生の思想は、北海道の素晴らしい大地に命を見つめ続ける記念館として残されている。今の池田名誉会長がお造りになられるものは何か、それは世界文明研究所をおいてほかにないと私は思います。

### 弱い者の立場に立つ

創価学会のスタートは牧口先生にありますが、私も、牧口先生と同じように小学校の校長をしています。父が校長をしていたころは、日本が同和教育を開始したころでした。私は三重県の生まれですが、私が生った近くにも被差別部落があって、父が39歳で校長として赴任した小学校は、同和地区とその他の地区の子どもたちが一緒の学校区でした。そこで父は被差別部落の子どもたちの教育を命がけでやりました。朝は7時ごろに出かけ、帰りは毎日、真夜中の12時前後でした。子どもたちが学校から帰った後、同和地区の親御さんに文字を教えたり、子どもを学校にきちんと

寄りこしなさいとか、家の衛生状態や家族の問題まで相談にのって、親御さんの教育をしていたのです。その結果、過労で49歳で死にました。

若くして死にましたが、その父が最後に私を駅まで送ってくれたとき、「喜憲、いいか、世の中の組織や国家というものがうまくいつているかどうかは、弱い者の立場に立った時にはじめてわかる。弱い者の立場に立つて、いつもものを考えるように」、それが父の私への遺言でした。

それで地理学をやり始めて学者になろうと決めたころ、この世の中で一番弱い立場に立たされているものは何かを考えました。それは、ものを言えぬ自然であるということに気づいたのです。熱帯雨林や海の中に暮らす生きものたち、さらにはその生きものたちと共存して暮らすようにしている少数民族の人々、こうした人々や生きものたちが、この地球上で一番弱い立場にあるのではないか。だから、これをまず救うということから自分は地理学を始めようと思つて、今まで環境問題をやってきたわけです。

牧口先生も同じでした。小学校で弁当のない子どもたちに自分で弁当を作って持って行って、そして子どもたちを一生懸命教育された。その弱者への深い慈しみの精神、その心が今やつと、この地球環境問題が起こってきたことよって高く評価され認められるようになったのです。

私が学生時代は、創価学会といったら弱い者いじめをして、弱い者から財産を奪い取つてとんでもない新興宗教の集団だとののしられていた時代でした。ここで講演を聴いておられる創価学会の幹部の方々は、「いや、違う。牧口先生から始まって戸田先生、池田先生に受け継がれた生命の法、命を守る法、これが人類を救う」ということに確信をもつて入信されたわけです。

その信念が、いまやつと、地球環境が悪化して、地球上の命あるものが危機に瀕し、このままいけば人類の生存さえ脅かしかねないその時になって、評価され始めたのです。この地球上で生きていくには、人間だけでは生きていけない。人間と家畜だけでは生きられ

ない。この地球上の命あるものすべての命が輝く世界に生きてこそ、人間も健康に幸せに暮らせるのだというところに人々が気づき始めたときに、何十年も前に選択された「生命の法に一生を捧げる」という道が正しかったことが、やつと立証され始めたのです。

### 「生命の法」の原点は大陽と海

私は、法華経というものどこから入ったかという、最澄さんから入りました。最澄さんの「山川草木国土悉皆成仏」、山や川や草木、国土が皆仏になれるという、このことが、人類の未来のキーワードだと、ずっと以前から考えていました。その後、日蓮さんは海から上がってくる太陽にむかって「南無妙法蓮華経」と唱えられたといえます。太陽こそ生命の源です。この太陽が、稲作漁撈民のシンボルなのです。米を食べ、魚を食べる人間は、太陽を崇拜しました。東の空から昇ってくる太陽、それが西の空に沈む。また翌朝、太陽は生まれ変わって昇ってくる。永劫の再生と循環を続けている。だから、この宇宙の生きとし生けるもの



は、太陽が東の空から昇って西の空へ沈むように生まれ変わって、永劫の再生と循環を命は繰り返している。それが「生命の法」の原点です。生命の法の原点には太陽があるのです。

太陽を崇拜したのはなにも稲作漁撈民だけではありません。エジプト文明の人々も、さらにはマヤ文明やアンデス文明の人々も太陽を崇拜しました。古代、人々は太陽こそ生命の源であることを直感的に感じ取っていたのです。

そして、日蓮さんは海にも注目されました。これはすごいことです。海すなわち水は生命の源です。地球の生命は海から始まります。海すなわち水こそが、命の源なのです。21世紀の「生命の法」の原点は太陽と海（水）にあるということができます。

最澄さんが注目したのは森です。空海さんが注目したのも森と海です。最澄さんは、出家されて比叡山の森の中で修行された。空海さんは、出家されて紀伊半島や吉野の森の中や四国の海で修行された。また、信仰した教義の頂点にあるのは大日如来すなわち太陽で

した。そして日蓮さんも太陽と海に注目されたのです。

皆さんは幸せですよ。21世紀の世界をリードする思想に巡り合われたわけですから。どうして巡り合われたのかは知りません。でも、「入ろうかな」と思われたということが大事なのではないでしょうか。誰が「入ろうかな」という思いを起させたのか。そこに私は村上和雄先生<sup>(10)</sup>の言われる「サムシング・グレート」の存在を感じるのです。

私たち日本人は、目に見えない神や仏の存在を信じていることができます。皆さん方もそうでしよう。でも世界には神や仏の存在を否定する人々がいます。神や仏の存在を信じる人とそうでない人のどちらが、21世紀の地球環境問題を解決するために大きな役割を果たせるかといったら、それはやはり前者の「サムシング・グレート」を信じる人であると私は思います。

### 「拝金の法」から「生命の法」への転換

現時点において「アメリカと中国、どちらが地球環境問題を解決する上で大きな役割を果たせるか」とい

つたら、それは間違いなくアメリカだと言わざるをえません。なぜかという、アメリカの国民の80%が敬虔なキリスト教徒だからです。キリスト教にもいろいろな問題がありますが、メガチャーチ（大教会）で牧師さんが、自然を守ること、この地球上の生きとし生けるものの命を守ることが神の意志であると説くだけで、人々の環境意識は変わるでしょう。

これに対して、神や仏の存在を否定する中国の人々が、なぜあれほどまでにお金、お金というのか。それは、自分の心が不安だからではないでしょうか。見えるものを信じることができない。信じられるのはお金だけ。人間は、何かを信じなければ生きられません。だから、中国の人々はいま拝金主義に走るのだろうかと思えます。この中国の人々を「拝金の法」から「生命の法」にどう変えることができるか。どうすれば、中国の人々に「生命の法」の重要性に目覚めていただくことができるのか。日本人でさえ「生命の法」の重要性に目覚めるのに30年以上もの歳月が必要でした。中国ではあと50年以上はかかるでしょう。しかし、それ

まで地球がもつかどうかは今、問題なのです。

いくら中国のトップのエリートが「生命の法」の重要性に気づいても、13億人もいる人間の中には必ず悪いことをする人間がいるわけです。そういう13億の人々に「生命の法」の重要性に気づいてもらうためには、どうしたらいいのか。それはひとつの宗教教団の枠をはるかに超えた全人類史的・文明的挑戦であると思います。

なぜなら、それができなければ人類は滅亡するかもしれないからです。欲望のまま、拝金の法のままに自然を破壊し、環境を破壊していったら、人類は2050年から2070年に滅亡するかもしれないのです。少なくとも現代文明が崩壊するのは間違いないでしょう。そうした悲劇を回避するために、人類は今こそ「拝金の法」から「生命の法」に立脚した「生命文明の構築」に向けて立ち上がらなければならないのです

### 生命文明の世紀に向かって

地球温暖化が危機的様相で進行しています。地球の

年平均気温が2度上がったら、まず珊瑚礁が絶滅するといわれています。珊瑚礁は大気中のCO<sub>2</sub>をいっぱい吸収しているわけです。その吸収力が激減します。そして、気温は急激に上昇します。同時に、生物の多様性が損なわれます。地球の年平均気温が3度上がったら、北極の氷がゼロになると予測されています。<sup>(11)</sup>そして5度上がったら、現代文明が崩壊するというのが今のシナリオです。

IPCC（政府間気候変動パネル）は、このままいったら2100年には地球の年平均気温は最大で6・4度上がるかもしれないと予測しています。

私たちホモ・サピエンスが20万年前にアフリカで誕生してから17万年間は、寒い氷河時代が続きました。われわれホモ・サピエンスの体は、寒い氷河時代に適用するように生理的にできているのです。だから、これから氷河時代がやってきても、人類は絶滅しません。最後の氷河時代の冷たい環境の中でも、人類はマンモスとともに暮らし生き抜いてきたからです。私たち人類にとって、寒くなるのはいいんです。

今の地球のCO<sub>2</sub>濃度は380ppmを越えています。こんな時代は、過去40万年の間に一度もない。40万年間の最大のCO<sub>2</sub>濃度は300ppmです。それを現在の地球はすでに80ppmも突破しているのです。このままいったら、2100年には、1100ppmというとんでもない数字になると予測されています。<sup>(12)</sup>

今まで人類は、地球の年平均気温が2度高い時代を体験しています。縄文海進とよばれるところで、7000年前の地球の年平均気温は現在より2度高かった。ところが、3・5度以上も高かった時代をホモ・サピエンスは体験していません。ましてや5度なんていうと、60万年前に人類が誕生してから一度も体験したことのない暑さです。今よりも年平均気温が7度とか10度も低い寒冷な時代を人類は生きのびた。ところが、いまより3・5度以上、平均気温が高い時代を生きのびた経験はないのです。

これが恐竜だったら別です。恐竜は、地球が温暖化する環境に適応した生物です。中世代の白亜紀は、地球温暖化の時代でした。恐竜は、その地球温暖化に生

理的な適応をさせて大繁栄しました。では、なぜ恐竜が絶滅したか。それは、ユカタン半島とメキシコ湾に隕石が大衝突したからです。その噴煙が地球を覆って、地球が一気に氷河時代となったからです。地球温暖化に適応した恐竜は、突然の氷河時代の寒冷気候の到来で絶滅したのです。

われわれ人類、ホモ・サピエンスは恐竜とはまったく逆です。寒冷化することに適応してきた生きものです。それが突然、地球が温暖化し始めた環境に今、直面している。ひょっとしたら人類が絶滅の危機に直面するというようなことも絵空事ではなくなるかもしれません。そういう危機の時代を引き起こさないためにも、地球を生きとし生きるものが幸せに暮らせるような世界にしなければいけない。地球を「生命の法」で覆いつくす。地球を「生命の法」のネットワークで覆いつくし、新たな「生命文明の時代」<sup>(12)</sup>を構築しなければ、人類はこの地球上ではもはや生きていけないのです。

皆さんの果たすべき役割は、きわめて大きいと言わ

ざるをえません。この地球をどう守るか。生きとし生けるものの命をどう守るか。それが今、創価学会に要望されているのです。それは仏の声です。仏が命じているのです。何も創価学会が時代の精神に合わせたわけではありません。時代の精神が創価学会に近づいてきたのです。だからこそ、21世紀の地球環境問題の世紀に「生命の法」を掲げてきた創価学会が果たすべき役割は、きわめて大きいと思うのです。

本日講演させていただきました内容についてさらに深くお知りになりたい方は、近刊の『一神教の闇』<sup>(13)</sup>と『生命文明の世紀へ』<sup>(14)</sup>の中に、くわしく述べておりますので、ご一読たまわれば幸いに存じます。ご清聴まことにありがとうございます。

#### 参考文献／注

- (1) 牧口常三郎『人生地理学』文会堂、1903年
- (2) 志賀重昂『日本風景論』1894年 講談社学術文庫 1976年
- (3) 『牧口常三郎全集第一巻 人生地理学(上)』第三文明

- 社、1983年 『牧口常三郎全集第二巻 人生地理学(下)』第三文明社、1996年
- (4) 石田龍次郎「明治・大正期の日本の地理学界の思想的動向」地理学評論44—8、1971年
- (5) 国松久弥「『人生地理学』概論」第三文明社、1978年
- (6) 安田喜憲「環境論の新たなる地平」雑誌地理32 1987年 30—37、
- (7) 安田喜憲『世界史のなかの縄文文化』雄山閣、1987年
- (8) 安田喜憲編著『巨大災害の時代を生き抜く』ウエッジ選書、2005年
- (9) 畠山重篤『森は海の恋人』文春文庫、2006年  
『牡蠣礼讃』文春新書、2006年
- (10) 村上和雄『生命のバカ力 人の遺伝子は97%眠っている』講談社+α新書、2003年  
『サムシング・グレートの導き「心の科学」から見えてきたもの』PHP研究所、2007年
- (11) Steffen, W., et al., IGBP Executive Summary, *Global Change and the Earth System*. IGBP Secretariat Royal Swedish Academy of Science, 2004.
- (12) Oldfield, F. and Alversen, K.: 'The societal relevance of paleoenvironmental research. Alversen, K. et al., (eds.) : *Paleoclimate, global change and the future*. Springer, 1-11, 2003.
- (13) 安田喜憲『一神教の闇』ちくま新書、2006年
- (14) 安田喜憲『生命文明の世紀へ』第三文明社、レグルス文庫、2008年
- (やすだ よしのり) 国際日本文化研究センター教授
- (本稿は、2007年9月25日に行われた当研究所主催の公開講演会の内容をまとめたものです)